

29

明治初期日本における西洋解剖学的 人体イメージの普及過程

——上田文齋の内臓図——

月澤美代子

順天堂大学医学部医史学研究室

明治初期、欧米から導入された医療「情報」は、さまざまな手段を介して日本全国へと広がっていった。西洋解剖学の教える人体に関する知識も同様である。欧米で出版された解剖学書に掲載された解剖図は、職人たちの手によって銅版に模刻され、西洋医学を学ぶ医師たちによって日本語の解剖学用語が『重訂解体新書』、『医範堤綱』等から選び出され、あるいは、新たに創作されて付けられ、刊本として出版されていった。また、散発的とはいえ、刑屍体等による人体解剖演習が各地の医学校に取り入れられていった。しかし、解剖演習に参加することのできなかつた一般民衆は、西洋解剖学の教える人体の「内景」に関する情報をどのように得ることができたのだろうか。医師たちによって翻訳刊行された欧米の人体解剖学書を、民衆は直接手にすることができたのだろうか。西洋解剖学の教える人体の「内景」は、何を媒介として、どのように民衆の間に広まっていったのだろうか。

1875（明治8）～1878（明治11）年にかけて、「人体問答」を表題に掲げた一群の安価本が日本各地で刊行された。本研究では、これを「人体問答」書として分析の対象とする。「人体問答」書には人体内臓図が巻頭に掲載されていることも多く、現在でも医学書として各地で展覧されることがある。しかし、「人体問答」書は、初等教育を受ける小児向けに出版された教科書であった。1872（明治5）年、学制が公布されて近代公教育制度が導入され、日本全国に小学校の設置と就学が奨励された。これに伴い「学校教科書」による伝達という一般民衆に対する新たな情報回路が開けることになる。

1873（明治6）年に開校した東京の師範学校は、当時、開成学校で英語の教師をしていたマリオン・スコットを招聘し、スコットが体験してきたアメリカの初等教育をそのまま日本に模倣移植することから開始された。「問答」は、このスコットの指導を受けて師範学校が1873（明治6）年2月に制定した「下等小学教則」で初めて導入された教科である。「問答」教育の本来の目的は、オブジェクト・レッスン（庶物指教・実物教育）の理念のもとに、「小児の感覚を挑発し」、「考究を究め」、「智力を培養」することにあった。

しかし、明治初期の日本人は、「人体問答」を、「問答」形式によって小児に「人体」に関する知識を注入する教科と捉えた。「学制」期においては、教科書の中央統制は行われておらず、「土地の状況に応じて」、各地で教科書を出版することが可能だった。多種多様な社会的・文化的・教養的背景をもつ、いわゆる地域の知識人たちが、それぞれの解釈に基づいて「人体問答」書を刊行した。小児向けの安易な教科書である「人体問答」書は、自由に模倣改変され、互いに交雑を繰り返しながら、日本各地に広がっていった。

現在、日本に保存の確認されている「人体問答」書を網羅的に調査し、56冊の電子データを蒐集して分析検討した。本発表では、明治8年11月に刊行された大阪の医師・上田文齋の『校正小学人体問答』を中心として、「人体問答」書に掲載された「人体内臓図」の誕生、模倣・交雑、普及の過程を追い、上田文齋『校正小学人体問答』が、一般民衆への解剖学的人体イメージの普及に大きな役割を果たしたことを明らかにする。

（本発表は、平成21～23年度文部科学省科学研究費助成研究「明治初頭日本における近代医学の受容と民衆の人体像」（研究代表者：月澤美代子）、および、平成24～26年度文部科学省科学研究費助成研究「明治初期日本における医療情報の伝達・普及・啓蒙」（研究代表者：月澤美代子）の研究成果の一部である。）